

もの言う牧師のエッセー 第257話 リオ五輪⑤ 「帰って来た男」

人類最速スイマーを決める僅か20秒余りのレース、競泳男子50メートル自由形で、35歳の米国選手アンソニー・アービンが2000年シドニー五輪以来、16年ぶりに金メダルを獲得。タトゥーが冴える両腕を高々と上げガッツポーズ。ついにどん底から這い上がり表彰台に帰って来た。序盤、彼は出遅れたが、25メートルを過ぎたあたりから前に出てフィニッシュ。何と2位とは100分の1秒差。そして、競泳の個人種目では史上最年長の金メダリストとなった。「ウソみたい。16年たって再び五輪の表彰台へ戻るなんて。ものすごい旅だったよ」と興奮気味に話す彼。

黒人の父と白人の母の間に生まれ、シドニー大会において19歳で黒人系金メダリストとして注目を集めたが、押し付けのイメージに嫌気が差し04年に引退。両腕のタトゥーはこの頃彫ったという。酒やドラッグに溺れ、自殺未遂をしたこともあったが、思い直して11年に現役復帰。12年のロンドン五輪では5位入賞を果たし、ようやくこの度の快挙に至った。全く彼はとんでもない遠回りをしたものだが、「済んだことは忘れたよ。全てのことが今の私を作っている」と話す彼を見て、“人類最高のラブ・ストーリー”と称される、イエスの有名なたとえ話「放蕩息子」を思い出した。

ある金持ちの父親のいる息子が、親が健在にも関わらず財産分与を請求。父が要求どおりに与えたところ、彼はさっさと荷物をまとめて出奔。遠い国で放蕩三昧の末、無一文になった彼に飢饉が直撃。どん底の中で彼は父を思いだし帰郷したところ、何と父は帰ってきた息子を走り寄って抱き寄せたのだった。

「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかった。」

ルカの福音書15章24節、

と喜んで息子を迎えた父親は神を指す。いっぽう放蕩息子は人類を指すが、さらに踏み込めば、一度は神を信じたクリスチャンを表す。神を信じようが信じまいが人は間違いを犯す。しかし神は、フラフラと遠回りをして死んだも同然の者であっても、反省し立ち直ろうとする時、無条件に手を差し伸べる。これを福音（ゴスペル）と呼ぶ。

2016-10-4

